

サムエル・ジョンソン「翻訳史」(翻訳と解題)

大久保 友博(訳)

はじめに

本稿は、18世紀のイギリスで活躍した作家・批評家のサムエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-84)が執筆した雑誌向け連載コラム「アイドラー [漫歩者]」(“The Idler”, 1758-60)のうち、第68回・69回の「翻訳史」(“History of Translations”, 1759)を、翻訳の歴史について触れた最初期の重要な文献として本邦初訳を試み、近代英国および翻訳史上の理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。構成としては、まずは日本語訳を掲げ、そののち解題として、底本テキストの検討、著者・背景・内容についての解説および考察を記述する。

〔日本語訳〕

「アイドラー」第68回 1759年8月4日(土)

この300年以上ものあいだ、才人・学者らに頭を使わせてきた修業のなかでも、翻訳という技芸ほど熱心に、または上首尾に培われてきたものはなかろう。このことによって、学知に至る道を阻んでいた障害はある程度取り除かれ、言語が種々ばらばらである狭苦しさも、多少はなくなっているのである。

文章のなかでも他の類ではみな、古代人も我らに手本を残してくれており、ことごとく後代がつとめて見習ってきたが、翻訳はまさしく現代人が自分らのものだと主張してしかるべきものだろう。世界の黎明期には、教授はふつう口頭で行われ、学問も口伝であったから、書かれなかったものが翻訳されようはずもなかった。字母をもって書くことで、意見の伝達や出来事の報道はそれまでよりも容易く確実なものになっても、やはり文芸は一度に2ヶ国以上では栄えず、遠国同士の互いの〔文芸上の〕交易もまずなかった。知識欲から改善を求めて海外に渡った数少ない人々も、手に入れた品を各自のやり方で配るが、おそらくは、他人から学んだものなのにその考案者と見なされたいと思つてのことなのだ。

ギリシア人は一時エジプトに渡ったが、エジプト語から書物を訳しはしなかった。やがてマケドニア人がペルシア帝国を打ち倒すと、ギリシアの支配に属することとなった国々も、ギリシア文芸のみを学ぶことになった。支配された国の書物は、よしその国にあったにせよ、忘却の淵へと沈むこととなった。ギリシアは自らを技芸の女王と、いや少なくとも技芸の親と任じ、

その言語に既知と思しきあらゆるものを収めたが、旧約の聖典を除いて、私の知る限りアレクサンドリア図書館には外国語からのものは何も受け入れなかったと思う。

ギリシア人の門人であると自認していたローマ人だが、その後の今に至るまでの出来事、つまり後世の無知な者たちが、おのれの師よりも自分たちを好むことになろうとは、どうやら思いも寄らなかったようだ。ローマにあつて文芸の榮譽に憧れる者はみな、ギリシア語の学習を必須と考え、原典に当たられるからと訳本を必要としなかった。とはいえ翻訳がまったく無視されていたわけではない。劇詩というものは、人々からすれば自国語でなければ理解できないものであり、ローマ人も時としてエウリピデスの悲劇やメナンドロスの喜劇を楽しんだものである。その他の作品も時には試みられ、古註にはラテン語の『イーリアス』への言及がある上、アラトスのキケロー訳も完全に散逸したわけではない。だが他者を訳して傑物となったものは誰もおらぬようで、おそらく名声のためというより、修練や慰みのために翻訳することが多かったのだろう。

アラブ人は、翻訳熱を抱いた最初の民族であつた。ギリシア帝国の東部地域を征服した際、捕囚のうちに自らよりも知恵のある者を見出し、その者から知恵を与えられ、はやる気持ちで欲求を満たしたのである。そこで少数のものゝ尽力があれば多くの者も知恵が得られることに気づき、さらに自国語で過去の時代の知識を持てれば、速やかに改善が行われようことを悟つたのだつた。ゆえに、はやる気持ちで医学・哲学〔の本〕を手に入れ、その主要著者らをアラビア語へと移したのである。詩人にも取り組まれたかはわからない。その者たちの文芸への熱意は猛烈であつたが短く、需要ある技芸からさらに雅な技芸へと踏み出す暇もないままに、おそらくはその熱意も消えてしまったのだろう。

古典文芸への関心がヨーロッパで途絶えたのは、北方諸民族が侵入したことがきっかけで、その者たちはローマ帝国を滅亡させ、新しい言語の新たな王国をうち建てた。こうした混乱から文学への興味がいったん失われても何ら不思議ではない。支配を失った者も得た者も、さまざま困難に会い、ただちに苦境を抜けださんと努めるため、戦時の暴力や敗走の混乱、強制移住の苦痛ないし收拾せぬ征服の動乱のただなかにあつては、真実を考え探究したり、空想の冒険を面白く楽しんだり、過去の歴史を知ったり、ましてや他者の人生の出来事を学んだりする余裕などあるわけがなかつた。だがこの混沌とした支配権争いにも秩序が生まれるとたちまち、学問も再び穏やかな平和のなかで栄え始めたのだ。生命と財産が安泰となれば、まもなく手軽で楽しいことが求められ、学問も精神の最上の喜びであると見なされ、そして翻訳がその喜びを得るための手段のひとつとなつたのである。

果たして様々な要因が絡み合い、欧州世界はその昏睡から目を覚ました。これら諸芸は長らく修道院の薄闇でひっそりと取り組まれてきたが、ついに人類一般の嗜好となつた。あらゆる国がその隣国と学問の誉れを競い、その流行が真似され南から北へと広がり、そして知識欲と翻訳が英国へようやく辿り着くに至つたのである。

「アイドラー」第69回 1759年8月11日(土)

英語文芸の進展を振り返る者は、翻訳というものが我らのあいだでかなり早くから培われてきたことに気づくだろう。だが同時に、(まったく間違っているかかなりの的外れである)ある考え方のせいで、頑張れば頑張るだけそのぶん成功する、ということもなかなか難しくなっていることがわかるだろう。

[ジェフリー・] チョーサーは通例、我らが詩の父と目されているが、ポエティウス『哲学の慰め』の訳本も残している。その書は中世でもかなりの人気だったと思われ、アルフレッド王の手でサクソン語にも訳されており、[トマス・] アクィナスのものと同様の〈注釈〉も大量につけられている。チョーサーが並々ならぬ関心を名高き著者に抱いていたと考えてもいいだろうが、ただ厳密な逐字訳以上のものは試みてはおらず、詩的な部分も散文に貶めてしまっているため、韻文という制約をつけてその忠実への熱意を抑えようという気にはならなかったのだろう。

1474年頃、[ウィリアム・] キャクストンは我らに活版印刷を教えてくれた。英語で刷られた最初の本は翻訳書であった。キャクストンは『トロイ陥落』の翻訳者兼印刷人だったのだ。学問の揺籃期には、神話時代の記述でも最良のものと同様の本で、今では大した便益もない著者どもによって関心外に追いやられているが、それでも今世紀初めまではキャクストンの英語で読まれ続けていた。

キャクストンは当初から変わらぬ調子で進めていき、[ジョン・] ガウアーとチョーサーの詩を例外として、フランス語からの翻訳以外は刷ることがなかった。そのフランス語原典をあまりに周密に辿りすぎたため、その訳は我らの自国語の知識を我らにもたらすことはまずなく、すなわち言葉は英語でありながら、その言い回しは外国のものなのである。

学問が進歩するにつれ、新しい作品が我らの言語のうちに受け入れられていったが、翻訳という技芸はいささかも改善されていないように見受けられる。諸外国や異言語は我らによりよい手法の手本を示してくれているというのに。エリザベス朝に至るまでには我らも、いつそのゆとりが雅には必要で、そして世に受け入れられるためにはその雅こそが必要だということに気づき始めていた。当時イタリアの詩人らに対する評論[エッセイ]がなされていたが、その者たちは後世の賞賛・評価にも値するものたちである。

ところが古くからの慣習をいきなり捨てられるものではない。オランダは国を逐字訳で満たし、さらにおかしなことに、同じ厳密さが頑なにも詩人の訳本でも採られたのだった。この文構造をそのままに韻文にするという愚かな労役は、[ベン・] ジョンソンによるホラーティウスの訳本でも採られた。才よりも学のある者が多いからか、当時の努力というものが喜びよりも知識欲に向かっていたからなのか、ジョンソンの精密さは、[エドワード・] フェアファクスの優雅さよりも多くの模倣者を見出すことになった。そうして[トマス・] メイや[ジョージ・] サンズに[バーテン・] ホリデイは、行を行に対応させて翻すという労苦に自らを縛り付けたが、実情としては同等の名句を伴い得なかった。なぜならば、メイとサンズはもともと

詩人であり、ホリデイはただの学者兼批評家であったからだ。

[オーウェン・] フェルサムは、行数は原典から増減してはいけないということを訳詩の確立された規範と捉えたようだった。長いあいだこの思い込みが幅を利かせていたがゆえに、[ジョン・] デナムがグアリーニのファンシオー訳を「新たなる気高き道」の手本であると、旧弊の壁を破って詩神のありのままの自由を持ち出した初めての試みであると称えるに至ったのである。

王政復古のお祭り騒ぎが生み出した、機知と才気の競い合いが流行るなか、詩人は自分にまつわる縛めを払いのけ、翻訳をもはや隷属のように息苦しいものとは見なさなくなった。だが改革というものが、純粋な美德からなされるなど、また裏のない動機からなされるなどまずありえない。翻訳は、信念というより偶然によって改善されたのである。先の時代の作家らには少なくともその才能と同等の学識があった。そして古代の人々の美点を見せたりその精神を注ぎ移したりすることよりも、その情趣を説いたりその引喩を解いたりする方が容易くできることが多いのは、おそらく豊かな学識で詩心の欠如を隠せることがあるからで、ゆえに字に従って訳され、その忠実さがその味気なさや粗さを覆い隠してしまうことになる。チャールズ [2世] の御代の才人らには、薄っぺらな意見以上のものがまぎらなかった。その者らの関心は、自らの足りない学をけばけばしい色の想像力の裏に隠してしまうことだった。ゆえに、いつも気ままに、時には身勝手に訳したもので、そしておそらくは知識をひけらかしても自分の読者が受け入れてくれると、無知や瑕疵にしても、せっかちでうっかり屋の頭が早く回りすぎて難点にも立ち止ま [って考えら] れず、熱くなるあまり細部を落ち着いて見られなくなってしまっているのだと [読者が好意的に] 考えてくれるものと、期待したのである。

したがって、翻訳は作家にとってお手軽なものとなり、読者にとって満足度の高いものとなった。そして楽をして楽しめるところからそれを支持する者たちが現れてもまったく不思議なことではない。意を積み取る自由は、ほぼ例外なく認められてきた。そして学識に秀でたる [エドワード・] シャーバーンは、不明瞭な訳文を少しばかり見逃したからとところでわざわざ申し開きするほどのものでもないにもかかわらず、近年でも昔年の厳格な手法を正当化ないし復活させようとしている今や唯一の作家となっている。

むろんのこと注目されるべき中庸もある。[ジョン・] ドライデンはかなり早くから、厳密さが著者の想念を最もよく保存しつつ、また自由さがその精神を最もよく示すのだとわかってきた。だからこそ、忠実かつ喜ばしい表現を与えるのみならず、同一の思想とともに同一の美点を伝えるばかりか、訳す際に言葉のほか何も変えない人物は、まったく至上の賞賛に値すると言えよう。

〔訳者解題〕

1 底本テキストについて

本翻訳で使用した底本は、以下のものである。

W. J. Bate, John M. Bullitt and L. F. Powell [eds.] (1963). *Samuel Johnson: The Idler and The Adventurer*. New Haven and London: Yale University Press, pp.211-217.

サミュエル・ジョンソンの著作について現状、最も信頼できる校訂版は、1958年から刊行されているシリーズ *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson* であり、上記底本はその第2巻に当たる。1955年にこれまでの版本を刷新する目的で企画され、現在インターネット上にもそのデジタル版(<http://www.yalejohnson.com/>)が公開されている。2010年に代表作のひとつ『詩人列伝』(*The Lives of the Poets*)が3巻本で公開されたあと、未刊を1巻残すのみとなっている。

“History of Translations” は、のち1761年に書籍としてまとめられた際に付された副題で、本翻訳では Yale 版底本の表記に同じく、その題を踏襲した。またその書籍化の折、本来第22回であった分が省略されたため、実際の連載回よりも、連番がひとつ少なくなっている(よって、本稿で扱ったコラムも連載時には第69回・70回であった)。

2 原著者について

サミュエル・ジョンソンは1709年、イングランド中西部バーミンガムの北郊外にある街リッチフィールド(Lichfield)にて、書籍商の息子として生まれた。幼い頃に左目・左耳に障害を被ったが、通っていた地元の私塾や文法学校での成績は優れており、オックスフォード大学に進むも、1729年末には学資の問題から中退している。そのあと彼は就職の失敗などもあり、しばらく鬱々とした時期を過ごす。その気晴らしにフランス語から重訳したロボ神父『アビシニア旅行記』(Father Jerónimo Lobo, *Voyage to Abyssinia*, 1735)を匿名で刊行しており、これをもって彼の文筆キャリアの嚆矢と見なすのが一般的である。

結婚した1735年からの数年間ジョンソンは私塾を開くが、そのなかで生徒として来ていた、のち名優として名を馳せるデイヴィッド・ギャリック(David Garrick, 1717-79)と意気投合、私塾閉鎖後の1737年春にふたりしてロンドンへと上京することになる。そのときにも、家業からつてのある書肆に、英訳すれば売れるとしてある仏語歴史書売り込んでおり、また翌年には古典作家ユウェナリス(Juvenalis)の第三諷刺詩の翻案である『ロンドン』(*London: a Poem in Imitation of the Third Satire of Juvenal*, 1738)を出して初めての世評を得るなど、ジョンソンの文筆と翻訳は、翻訳・翻案を広く受け入れる時代性もあろうが、元々かなり縁が深いものと言えよう。

このロンドンでは、そのつてのあった書籍発行元の月刊誌『紳士ノ雑誌』(*Gentleman's*

Magazine, 1731-1922)の最初の定期寄稿者となり、同じく寄稿していた多彩な文士たちとの交流を持つとともに、雑誌では雑文のほかいくつかの伝記記事や、架空の国の議事録を模した政治風刺記事「議会討議録」を連載しつつ、当座は貧乏文士としての生活に甘んじるしかなかったという。翻訳についても、アレグザンダー・ポープ『人間論』(Alexander Pope, *An Essay on Man*, 1733-34)に対する外国人学者の注釈を英訳したり(1742年)、ユウェナリスの別の諷刺詩の翻案をなしたり(1749年)、さらには各種文人の伝記記事のなかでもその翻訳行為について取り上げるなど、積極的に筆を揮っている。

ジョンソン最大の功績とされる『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*)の企図がなされ、出版社との契約のもとに作業が開始されたのは1746年6月のことだったが、実際の刊行はそれから10年弱ほど過ぎた1755年であった。見出し語42733項目(4版では43279)、語釈に付された引用も11万件を越え、2巻2500ページ超にもなる大作である(付録として「英語史」と「英文法」も収録)。彼は作業中ろくに支援もしてくれなかったパトロンと決別し、最終的にはこの刊行から1575ポンドを得ていたことから、ここに至ってようやくプロの文筆家として身を立てたとも考えられよう。

ジョンソンのもうひとつの本領は、定期刊行物に書き続けた評論としての多数のエッセイ群である。1749年冬頃から彼は、アイヴィー・レインなる通りにある肉料理店で友人らを囲んで座談会を始めており、この通称「アイヴィー・レイン・クラブ」(Ivy Lane Club)の交友がきっかけとなって、随筆新聞とも言うべき定期刊行物『ランブラー [徒然者]』(*The Rambler*, 1750-52)が1750年3月に創刊されている。社会や宗教のみならず、文芸・人生・道徳といった話題を闊達に語るこの雑誌は、地方郵便に合わせて週2回(火・土曜日)の発行で、彼は2年間でほぼ全てである208本のエッセイを認めた。大仰な筆致であったが、書籍としてまとめられて刊行されるや見事に売れて10版を重ねたという。

ただし『ランブラー』最終号の数日前に妻が死去したこともあってか、後続誌『アドヴェンチャー [冒険者]』(*The Adventurer*, 1752-54)には全140号のうち29号分しか寄稿していない。彼が再び健筆を揮ったのは、他者の編集する週刊紙『江湖録報』(*Universal Chronicle*, 1758-1760)に2号から終刊105号まで連載された寄稿コラム「アイドラー [漫步者]」("The Idler", 1758-60)であった。彼独特の抽象的で時にわかりにくい文体は「ジョンソン風」(Johnsonese)とも言われたが、このシリーズでは筆も円熟して内容もわかりやすくなっている。そのほか各紙に寄せた書評なども含めて、こうしたジョンソンの各種評論は、時に無断で国内外の新聞雑誌にも翻訳・転載され、18世紀においてモノの考え方のひとつの標準ともなった。

また一般文芸としては、同時期に書かれた小説『ラセラス』(*Rasselas*, 1759)が代表作であり、62年には政府から年金を得られるようになり、63年にはのちに彼自身の伝記作家となる青年ジェイムズ・ボズウェル(James Boswell, 1740-95)とも出会うなど、晩年はようやく訪れた安定の時期でもあった。自ら座談会を主宰する「文学倶楽部」も、その前身が1764年には始まっており、ボズウェルの記す箇に衣着せぬジョンソンのイメージはこの時期に確立されたものでもあ

る。晩年にはこれまでの文芸評論・作家伝記の集大成である『詩人列伝』(*Lives of the Most Eminent English Poets*, 1779-81)を当初は文学選集の序文集として企図しながらまとめ始め、次第に構想と紙幅が膨らんだ結果、大部の著作となっている。その一方で長らく体調不良に見舞われ、1784年12月に自宅で静かに亡くなっている。

3 背景・内容について

ジョンソンがコラムを寄せた週刊紙『江湖録報』(*Universal Chronicle*, 1758-1760)は、毎土曜日に刊行され、その週日のニュースをまとめて読者に届ける新聞であった。総8ページで、1面の3分の2がコラム「アイドラー」に宛てられ、2～7面が月曜から金曜までのニュース、8面には土曜分の報道と株式市場の動向が載せられていた。単純な記事が大半を占めるこの新聞では、ジョンソンのコラムがひとつの呼び物となっており(全104回のうち12本が他の人物による記事ないし寄稿であったが)、その人気から単行本になる以前から85本が他の雑誌や新聞ないし地方紙にも無断転載されたという。そのためジョンソンが警告文を出す羽目にもなっているほどだ。

1本の記事はかつての『ランブラー』よりも短く、また文章も大仰というよりむしろ肩の力が抜けて、読みやすくわかりやすいものとなっている。ひとつの円熟の表れであるが、扱うテーマについても、彼一流の「評伝」というジャンルに内包された史的関心が今回のコラム群にも現れている。歴史を政治や戦争だけでなく、広く社会にも適用するジョンソンは、自らの『英語辞典』でも、“history”を「出来事と事実をおごそかに語り伝えること・もの」と定義し、当該の辞書や各種エッセイでも、その出来事の変化の流れを捉えようとしている。

歴史学者のジョン・ケニヨンによれば、「当時 [18世紀半ば] のイングランドでは、歴史はまだせいぜい道徳や政治の規範か、洗練された余暇のすごしかたのひとつとしかみられていなかった」(51)という。その一方で、文筆業の隆盛から生まれた新しい評論家・批評家たちは、違った歴史の見方をしつつあり、デイヴィッド・ヒューム(David Hume)は1752年に『英国史』の執筆を開始し、1774年にはのちの桂冠詩人トマス・ウォートン(Thomas Warton)も『英詩史』を刊行し始めている。かたやジョンソンは、「詩人の伝記」というかたちで自国の文学史に、そして「辞典」という媒介を通じて自国の言葉の歴史に関心を持っていた。18世紀初頭の古典主義とは異なり単なる尚古趣味ではなく、また古代・現代論争のように対立する枠組みでもなく、このときの英国人は、国民たる自分たちを振り返るものとして過去の歴史を見ようとしたのである。

文学研究者のローレンス・リプキングは、「イギリスでは18世紀中葉にいたるまで、自国の芸術史が書かれたこともなければ、キャンノンもなく、趣味の基準を示すモデルすらなかった。ここにたって初めて多くのイギリス人たちは、自分たちには芸術の歴史が必要であり趣味には案内者が要ると考えた」(Lipking 3; 鈴木67)と述べる。18世紀には、技芸を理論化するというひとつの潮流があり、その技法や審美の原理などが探究された。そのなかで、そうした法理法

則の解明に資するものとしての「歴史」という手法もまた探られることとなった。むしろその代表がジョンソンであり、この歴史を書く時代にあつて、様々なジャンルについての歴史を書き、また自身で翻訳をなしていたジョンソンが、ここで古典主義文芸のテーマのひとつであった「翻訳」の歴史を書こうと思ひ立っても不思議ではない。ルース・マックが言うように、「18世紀の多くの作家」のひとりとして、「文芸こそが、我々みな過去に帰する真実性について考える手段なのである」(Mack 1)と強く信じていたのだとすれば、翻訳史の試みもこうした翻訳の審美基準や社会性を掴もうとする批評行為から取り組まれたことにもなる。

さて「書かれたもの(グラフィオス)」(ホワイト10, 36)として記述された内容と形式を見ると、「アイドラー」第68回では古代からルネサンスまでの、第69回では英国での歴史が語られている。第68回冒頭では、当時の批評の形式通り、語る対象である翻訳を学ぶべき「修業」(the Studies)のひとつ、「技芸」(the Art)と捉えた上で、その歩みや発展を振り返るかたちで書き起こしている。そして当時の英国から「起源」と見なされていたギリシア・ローマから始めているのも、よくある書き方である。

それでいて注目すべきなのは、かつて暗黒の時代と考えられていた中世欧州世界と対照させるかたちで、アラビア世界が意識されていることだろう。さすがに20世紀初頭におけるような「12世紀ルネサンス」とその仲介者としてのアラビア世界の再評価とまでは行かないが、ギリシア・ローマの一部を受け継ぐものとしてアラビア世界の翻訳運動が取り上げられるのは(さらに言えばやや好意的でさえあるのは)、数ある前近代・近代の翻訳論のなかでもかなり稀なことである。

第69回では、英国の文芸翻訳をおおむね分類という手法で取り扱っている。それぞれの訳を逐字訳(ないしは逐行訳)と自由訳という両極端なものに整理しつつ、最後に中庸もあるというかたちでまとめるわけだが、こうした論旨自体は、終わりに名前の挙がるジョン・ドライデン(John Dryden)の書いた「オウイディウス書簡集『序文』」の弁論テクニクに沿うものでもある。ただしドライデンの翻訳観を採用するにあたって、各訳者への評言をそのまま受け入れており、内容・妥当性の評価や検証がなされていないのは残念とも言える。

また取り上げる翻訳者が、ラテン語ないしは欧州諸語からの訳をなした者に限られているのも、ひとつの特徴である。当時の知識人は、外交能力としてラテン語と欧州諸語を修めており、その余技として翻訳を行った者が少なくない。一方で古典語としてのギリシア語は相対的に需要・重要度が低かったようで、そのこともあつてか(あるいはジョンソンの理解の範囲に留めたからか)、今の文学史・翻訳史ではよく触れられるジョージ・チャップマン(George Chapman)のホメロス翻訳を筆頭に、同じくホメロスやトゥーキュディデースを訳した思想家トマス・ホブズ(Thomas Hobbes)、当時ではまだ有名人の方に属するロジャー・レストレーンジ(Roger L'Estrange)、または出版人ジョン・オーグルビー(John Ogilby)などのギリシア語訳者たちも言及されていない。そういう意味では、取り上げた訳者・取り上げなかった訳者の選択には、どういった翻訳を「歴史」として認めるか、記すに値するかというジョンソンあるいは当時の価

値観が反映されているとも考えられよう。

さらに言えば、第68回が主に地域・国・民族における出来事を歴史として扱っている一方で、第69回では翻訳者という「人物」を取り上げている点からは、作品そのものよりもむしろ作家とその手法に関心があったことが見て取れ、ジョンソンが自国の文学史を評伝の積み重ねであると考えていたことがわかる。19世紀のトマス・カーライル(Thomas Carlyle)は歴史記述を「無数の伝記の精華」と考えたが、この第69回の原稿を、書かれなかった『訳者列伝』のための素描とあえて捉えれば、その先には「翻訳史」ないし「翻訳者の歴史」の可能性が広がっている。

ともあれ、この2回の記述は今となっては不正確ではある。アレクサンドリア図書館に外国語から訳された書物は他にもあったとされるし、中世の欧州で学問と翻訳・創作が表向きまったく行われなかったわけでもない。英国の翻訳者たちの整理もかなり表層的で、内実の変化と発展を捉えられていない。ジョン・ドライデンの自己弁護的な発言を真に受けるなどの問題点もある。ただ、それでいて「翻訳」をひとつの「技芸」としてまとめていこうとする動きのひとつとしては、たいへん重要なものであり、このジョンソンの素描が後世に与えた影響は大きい。とりわけ18世紀末の批評家・歴史家アレグザンダー・フレイザー・タイラーは、このジョンソン「翻訳史」冒頭と同様の意識から、批判的・審美的に発展させて大部の書物『翻訳原論』(*Essay on the Principles of Translation*, 1791)を著し、独自の「翻訳の三原則」を提示している。ジョンソンの「翻訳史」に関するエッセイは、翻訳が個人の行為として内省的に考察されてゆく過渡期を示すものとして、参照に値するものであろう。

主要参考文献

- Bate, W. J., John M. Bullitt and L. F. Powell [eds.] (1963). *Samuel Johnson: The Idler and The Adventurer*. New Haven and London: Yale University Press.
- Crystal, D. [ed.] (2005). *Samuel Johnson - A Dictionary of the English Language: An Anthology*. London: Penguin.
- Engell, J. [ed.] (1984). *Johnson and His Age*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Fussell, P. (1986). *Samuel Johnson and the Life of Writing*. New York: W. W. Norton.
- Gillespie, S and D. Hopkins [eds.] (2005). *The Oxford History of Literary Translation in English: Volume 3, 1660-1790*. Oxford: Oxford University Press.
- Hayes, J. C. (2009). *Translation, Subjectivity and Culture in France and England, 1600-1800*. Stanford: Stanford University Press.
- Lipking, L. (1970). *The Ordering of the Arts: In Eighteenth-Century England*. Princeton: Princeton University Press.
- (1998). *Samuel Johnson: The Life of an Author*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Mack, R. (2009). *Literary Historicity: Literature and Historical Experience in Eighteenth-Century Britain*. Stanford: Stanford University Press.
- Martin, P. (2008). *Samuel Johnson: A Biography*. London: Weidenfeld & Nicolson.
- Picard, L. (2003). *Dr Johnson's London: Life in London 1740-1770*. London: Phoenix.
- Rosenberg, B. C. (1995). *Virginia Woolf and Samuel Johnson: Common Readers*. Basingstoke: Macmillan Press.
- Saunders, J. W. (1964). *The Profession of English Letters*. London: Routledge.

Wain, J. (1974/1994). *Samuel Johnson*. London: Papermac.

- 江藤秀一、芝垣茂、諏訪部仁 [編著] (2009) 『英国文化の巨人サミュエル・ジョンソン』 港の人
- 大久保友博 (2012) 「近代英国翻訳論 — 解題と訳文 ジョン・ドライデン 前三篇」『翻訳研究への招待』 7 : 107-124
- (2015a) 「近代英国翻訳論 — 解題と訳文 ジョン・ドライデン 後四篇」『翻訳研究への招待』 13 : 83-102
- (2015b) 「ドライデンの翻訳論と中庸の修辞」『十七世紀英文学を歴史的に読む』金星堂、211-231
- 小川和夫 (1973) 「エッセイ」『講座英米文学史13 批評・評論Ⅱ』大修館書店、1-118
- 桑子利男 (1999) 『英国批評研究序説 — ジョンソンからエリオットへ —』音羽書房鶴見書店
- ケニヨン、J (1988) 『近代イギリスの歴史家たち—ルネサンスから現代へ—』(今井宏・大久保桂子 [訳]) ミネルヴァ書房
- コリンズ、A・S (1994) 『十八世紀イギリス出版文化史 作家・パトロン・書籍商・読者』(青木健・榎本洋 [訳])彩流社
- シュウォーツ、R・B (1990) 『十八世紀ロンドンの日常生活』(玉井東助・江藤秀一 [訳])研究社
- ジョンソン、S (2009) 『イギリス詩人伝』(小林章夫 [ほか訳])筑摩書房
- 鈴木雅之 (2016) 「イギリス・ロマン主義時代の「古典」観」『古典について、冷静に考えてみました』岩波書店、61-78
- 福原麟太郎 [ほか訳] (1963) 『世界人生論全集 5』筑摩書房
- (1972) 『ジョンソン JOHNSON』研究社
- ホワイト、ヘイドン (2017) 『メタヒストリー — 一九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』(岩崎稔 [監訳])作品社
- モンゴメリ、S (2016) 『翻訳のダイナミズム — 時代と文化を貫く知の運動』(大久保友博 [訳])白水社
- 矢本貞幹 (1961) 『イギリス批評 — 十七・八世紀』研究社